



1962年、中国四川省成都生まれ。北京大学哲学部卒業。四川大学哲学部講師を経て、1988年来日。1995年、神戸大学大学院文化科学研究科博士課程修了。民間研究機関に勤務ののち、評論活動へ。2007年、日本に帰化する。著書に『なぜ中国から離れると日本はうまくいくのか』（PHP新書、第23回山本七平賞受賞）『日本の心をつくった12人 わが子に教えたい武士道精神』（PHP新書）『中国の脅威をつくった10人の政治家』（徳間書店）など多数。

——日本人は、日中国交正常化以来、経済的な相互依存が深まれば、中国との緊張が緩和するとか、中国の体制が変

中国は最大の脅威であること
を日本人は決して忘れてはなりません。

な支援をしましたが、中国から歴史問題で叩かれ
たり、反日デモが起こったり、日本の尖閣諸島が
狙われている。日本のODA支援や技術支援は、
結果的に中国の軍事力の強大化につながり、日本
や世界に大きな脅威となっています。その脅威を
育ててしまったという教訓に立てば、中国は近隣
ですから全く関係を断つのは難しくとも、あまり
深入りしない方がいいわけです。
そして大事なのは、今後も中国が日本にとって
安全保障上の最大の脅威になる、日本人はそこか
ら目を逸らしてはいけない、ということですよ。

2022年（令和4年）8月、中国人民解放軍が
台湾周辺で軍事演習を行いました。中国の発射し
た9発のミサイルのうち5発が、沖縄県の与那国
島南方にある日本の排他的経済水域内に着弾しま
した。その意味するところは、安倍晋三元首相が
指摘していたように、「台湾有事はすなわち日本
有事、中国の台湾侵攻が日本とアジア全体の平和
を根底から覆してしまう」ということです。先
の大戦より最大の危機を齎す可能性があります。
今も日常的に、日本の領海・領土が中国によつ
て侵犯されています。日本の安全保障において、

特別
インタビュー

いま日本人の価値観や精神性が 求められている

評論家
石平

◆中国は日本の最大の脅威である

——現在、中国が台湾に向けて武力侵攻する恐れ
が高まるなど、中国の軍事的脅威が増しているこ
とは、日本の安全保障に大きな問題となっていま
す。こうした中、私たち日本人が考えなければい
けないことについてお聞かせください。

石 まずは日本にとっての「中国」とは何かを考
えてみましょう。日中関係の歴史を見れば、飛鳥
時代や奈良時代から漢字や仏教など様々なものが
中国大陸から日本に伝わり、日本にとって中国は

重要な隣国であることは確かです。

一方、日本の長い歴史からすると、中国と無関
係だった時代は日本にとってむしろ平和で安定し
た時代です。平安時代にしても江戸時代にして
も。だから、日本は中国と一定の距離を置いてほ
どほどの関係をもった方がいい、というのが私の
考えです。

むしろ、中国と関係をもったり大陸に深入りし
たりしたこと、必ず日本には良くないことが起
きています。それは歴史的に言えることですが、
現代においても1972年（昭和47年）に日中国交
が回復してから50年以上が経ち、日本はいろいろ

わるのではないか、という幻想を抱いてきたところがありますね。

石 その過ちは、日本人だけでなく、アメリカ人もそうです。キッシンジャー路線がそれです。中国の近代化を支援すれば、いずれ民主主義社会に融け込む、中国の体制は変わる、と。それは見事に裏切られ、中国は成長すればするほど、独裁政治が強まり侵略的覇権主義をむき出しにして、ますます秩序を脅かす存在になっています。

しかし、アメリカはもう目覚め、中国の封じ込め路線に転じています。日本も、第2次安倍政権から目覚め始めた感がありますが、まだまだ中国への幻想を捨て切れないのが問題です。

——どうして幻想がなくならないのでしょうか。

石 一つには、中国に対する一種の過大評価的な考えがあるからです。中国は悠久な歴史があり、素晴らしい文化・文明をもっていて、日本文化の源流にもなっている、という歴史的な幻想です。私からすれば不要なものです。中国からいろいろ

中国には儒教があつて「礼儀」の文化ですが、中国人よりも日本人の方が格段に礼儀正しい。中国人自身が、日本人に感心しているほどです。

——そもそも中国人は、日本人のことをどう考えているのでしょうか。

石 時代や階層によって異なりますが、実は中国の文化人は昔から日本にすごく憧れをもっています。日本人にはあまり知られていないことです。

徐福伝説もそうです。『史記』に記されているのは、2200年前、秦の始皇帝が徐福に命じて、不老不死の薬を求め、仙人の住むところに向かわせた。それが日本です。中国には古来、中華思想があり、中華以外は野蛮な国々しか思っていない。唯一、日本だけが仙人の住む国だと思っていた。だから徐福伝説が日本各地にあるわけです。あの時代から、中国にとって日本は憧れの地であるのです。

中国のいろいろな歴史書には、日本について

な文化的要素が伝わったのは事実ですが、日本の文化・文明は中国の亜種では全くありません。むしろ全く違った独自のものです。一部に中国的要素を探り入れただけであつて、様々な異文化を探り入れ、自分たちの文化づくりに生かしてきた、というのが日本人の特性であり能力なのです。だから、日本人が中国文化にコンプレックスを抱く必要は全くありません。

多くの面で日本が優れていることは多い。漢字文化ひとつ取って見ても、いま漢字文化を正しく生かしているのは日本の方です。中国では共産革命以来、もう廃れています。文学においても、『源氏物語』は世界的に人気を博していますが、中国にはそれに匹敵するような、世界的な影響力のある文学は何もありません。ノーベル賞の受賞者でも、日本人は毎年のように輩出していますが、中国国内にいる人では2人のみ。科学技術でも、アニメ文化だって、日本にはあります。しかし中国には世界に誇る文化が何もないのです。

「礼儀正しい」「人々が純粹」「社会的に風俗が正しい」などと書かれています。歴史的に、遣唐使などで日本人が中国大陸に渡っても、必ず日本に帰るでしょう。帰らなかった例はわずかしかなり。しかし、中国人は渡来人として日本に大量に住み着いている。それは日本が良いところだからです。近代になっても、明治時代から大量の中国人留学生がやってきていますね。

だから、日本人は中国人に対して不要なコンプレックスを感じてはいけません。むしろ中国人にとって、魅力的、憧れの国が日本なのです。

◆日本の皇室は世界史的な奇蹟である

石 日本の素晴らしさで言えば、特に日本の皇室は世界史的な奇蹟であると、私は非常な尊敬の念を抱いています。

それは日本に来てからの実感です。日本に来たのは1988年(昭和63年)ですが、その翌年の1

月に昭和天皇が崩御され、「大喪の礼」が行われました。古式に則って厳かに執り行われ、日本国民が心から哀悼する光景は、私にとって衝撃的であり感動的でした。日本の国は天皇を中心として成り立っていることを実感したのです。

中国には易姓革命があり、王朝ができて10数年から長くて数百年で必ず崩壊しています。しかし日本は、神武天皇が奈良・橿原の地で建国を宣言されてからずっと、政治体制が変わっても、天皇をいただく国体が万世一系統いています。

その理由は、考えてみれば簡単です。中国の王朝は、天下万民を私物化し搾取するからです。搾取する人間はいつしか民衆の反乱によって滅ぼされるのが歴史の法則です。

その反対に、日本の皇室・天皇は国民に奉仕する、国民の幸せを祈る存在だからです。日本国民にとって、自分たちの幸せが天皇の祈りの上に成り立っている——その認識が、おそらく権力者から一般庶民まであったからです。そのようなご存

日本人である以上、大多数の日本人は(左翼は少しいますが)心から慶びを感じたわけでしょう。

——そうした日本人の誇りがしつかりあると、対外的にもきちんとした国家たり得るわけですね。

中国の習近平に……

石 習近平の話は今日はやめましょう。天皇陛下のことを語るのに、習近平の名前が出ることで自体がおかしい、あれは汚れなのです。

◆日本人がもつ多様性や融和の精神

——これからの世界において、日本人の価値観や精神性が求められることはあるでしょうか。

石 私はそう思っていますよ。最近、あらゆる人種の人々が日本に観光にやってきましたが、それは日本の美しさ、日本人の親切さ、日本食のおいしさ、いろんなものを求めて来ているわけでしょう。すべてが日本の魅力です。

日本は、西洋文明もきちんと採り入れながら、

在だからこそ、為政者とは全く違う、世界中のあらゆる権力者より上に立つ存在として、万世一系になり得たのです。

私は京都御所を見学したことがありますが、御所の塀は何一つ防備になっていないでしょう。泥棒でも簡単に入れそうな感じですが。だからと言って、日本の歴史上、御所を襲う者は一度も現れたことがありません。

「無敵」という言葉がありますね。中国で理解されているのは、「強すぎて敵がない」から「無敵」です。しかし、天皇は「無欲」だから敵が無いのです。強い者はいつかは滅びます。しかし、欲望をもたない存在が減ぶことは、まずありません。だから皇室は最上の「無敵」と言えます。

万一、天皇が日本から無くなったら、それはもう日本ではなくなります。日本人の根底には、空気のようにふだん意識しなくとも、皇室の伝統に対する気持ちがあり、必ずそれが出てくる時があるのです。今上天皇が即位された時にも、

西洋文明には無い部分もまた多くもっています。それは、神道的なものにしても仏教的なものにしても、日本が古来もっているものがすごくたくさんあるのです。

例えば、伊勢神宮では20年ごとに遷宮があり、社殿などすべてを新しくしますが、また次や次の遷宮の時のために木を育てて森をつくるでしょう。これなどまさに産業文明を超えた、永続性をもった一種の文明ですね。木を伐って森林を破壊し、最後には何も残らなくなってしまふというのではない。式年遷宮が千年繰り返されたとしても、常に新しい木が植えられるのです。それは西洋文明などには無いものです。循環とか再生とか、あるいは自然との融和です。

日本庭園とヨーロッパの庭園とを比べてみたらすぐ分かるでしょう。ヨーロッパの庭園は、植物や自然に人間が手を加えて「自然にない形」にしてしまう。しかし日本庭園は、人の手を入れながら「自然そのままの姿」を生かすわけです。

日本の文化の中に、最初から自然と融合するよ
うな考えがある。神道しんどうの中にも、石ひとつにも神
が宿り、ご神体になつてしまふわけですから。

自然と融合する——だからと言って、日本は近
代化しないわけでは決してなかった。産業化もし
ながら、また自然に対する畏敬いけいや愛着を忘れな
い。そこから新しい文化・文明が生まれる要素が、
日本にはまだあると思います。それが日本の精神
文化において大事なところなのです。

神に対する態度、宗教観もそうです。一神教
は、往々にして一つのを絶対とすると、他の
ものを全部排斥する傾向にあります。しかし、日
本の神道は、決して仏教を排斥しませんでした。
神道は仏教に融和の態度を示しました。一神教の
人々からしたら「無頓着むとんちやく」と思えるかもしれま
せんが、私はそれだと思います。神社に
行つても拝むし、お寺でも拝む、結婚式は教会で
挙げたりもする。それが日本人ならではの正しい
宗教観だと、私は思います。

要するに、神様であれ仏様であれ、偉大なも
の、超越的なものに信仰心を感じるのですが、絶
対視はしないのです。絶対視することによって生
まれたのが、宗教戦争です。ヨーロッパの歴史を
見れば、カトリックとプロテスタントとがどれほ
ど血で血を洗う戦いを繰り返してきたことか。イ
スラムもそうですね。ところが、日本において宗
教と宗教との間で戦争が起こったことを、私は知
りません。宗教と政治権力との争いがあります
が。歴代の天皇にはお坊さんになられた方もいる
でしょう。そうした多様性と柔軟性をもつべきな
のです。

最も多様性を大事にする民族が日本人です。左
翼が今さらのように多様性うんぬん云々と言っています
が、愚かな話です。日本人は、数千年前から多様
性を大事にしてきた民族なのです。

このように、日本人が大事にしてきた価値観や
精神性がこれから世界にとって大切になってくる
と、私は信じています。